
俺こそが名脇役！

ふっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺こそが名脇役！

【NZコード】

N7768Y

【作者名】

ふつしー

【あらすじ】

恋愛に憧れる高校生、里美公太はなんと今年に入つてすでに告白四連敗中。それも決まって「あなたは違う」と言われてしまう。告白失敗に呆然とする公太の前に突如現れた黒い巫女服の美少女。彼女の名前は朱夏。縁結びの神を奉る巫女だという。朱夏が語りだした公太の告白失敗の理由。それはなんと公太の主人公時間が無くなつたことが原因だった。主人公時間とは、文字通り人生の間で人が主人公になつていられる時間。人生の主人公から降ろされた公太は一度と恋愛が出来ない体になつてしまつっていたのだ。だが、主人公

に戻る方法が一つだけ存在すると朱夏は語る。その方法とは『他者の物語に脇役として登場する』こと。脇役が他の主人公にとって、重要な存在となり人気者になれば、 спинオフとして主人公に返り咲けることがあるというのだ。この話を聞いた公太は、巫女の朱夏、親友の優と共に、主人公に戻るために名脇役になることを決心する！ 脇役視点で物語を描くドタバタ学園ラブコメディー！

プロローグ

「俺と　付き合つてください……！」

……ふふふ……、完璧だ……！！

金曜日の放課後。

一週間の中で最も気の緩むこの時間帯に、俺こと里美公太れとみじゅうたは人生の中で最も緊張していた。

静まり返った屋上で、思春期の男女が一人きりで向かい合つている。

聞こえるのは、風の音と微かな生徒の声と、そして俺の心臓の鼓動。

神々しくも切なく輝く夕日をバックに、俺は目の前の彼女に告白した。

了承を得るために差し出した右手。

角度、スピード、タイミング。まるで計算し尽くしたかの如くしなやかな動き！

それに加えて俺の表情。

恐怖、期待、緊張、その全てに堪え、必死に真剣な顔を作り出す。俺は本気だと意思表示を視線で行う！

さぞかし爽やかで、誠実な印象を与えたことだろう！

彼女の表情はどうだ！？　見てみろ！　頬が赤らんでいるではないか！

これも俺が今まで実行してきた作戦の賜物だと言えよう！　それはもう苦労したんだ！

出会いからこの告白まで、俺は様々な手を尽くした！

彼女の情報を得て、周囲の人間関係に根を回し！　同情を誘い味方を作った！

彼女の両親から姉妹、親友に至るまで！　クラスの皆からも応援

された！

屋上に彼女を誘つたとき、クラス中から黄色い悲鳴が飛び交つた！
その時の彼女は、恥ずかしそうにしながらも、期待するような視
線をこちらに送つてきたほどだ！

た
！

そしてこの苦由！これで断る女子なんていふはずもない！
恥らう彼女。いやあ、焦らしてくれるぜ！

彼女の第一声。それは栄光の告白了承に違ひないのだ！
わあ、答えてくれ――

「めんなさい。あなたじゃないの」「

うんうん。 そうだらけ、 そうだらけ。 こんな雰囲気の中、 断る女
子なんて

え……！？

「落ち着け、俺。何かの聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない。」「「！」」「ごめん！　よく聞こえなかつた！　もう一度お願ひ！…」…今度こそ、しつかりと聞くぞ！…」さあ、もう一度…」…「ごめんなさい。あなたは違うから…」

ふふん。そうね。やつぱり聞き間違いじゃなかつた……つて。
ええー? えええー————? ジ、ジハシヒー?」

「うるせんなさい……。わよなら」

俺の言葉を完璧に無視し、彼女は俺に目もくれず屋上から走り去つて行つた。

後にはポツンと俺一人。

「何故だ!? こんな馬鹿なことが……!?」

まさかの告白拒否。完全に想定外だ……。

「あ、ありえないぞ！？ 一体何が起こつたというんだ！？」

告白する前の彼女は誰が見たってOKだった。それなのに一体どうして！？

「俺、何か間違っていたのか！？ 知らないうちに彼女の嫌がるようなことを……？」

いや、それはないはずだ！ 彼女の性格、思想、趣向、人間関係や家族構成に至るまで徹底的に研究し、彼女の目を惹き、好みそうな行動をしていたんだ。

地雷を踏むようなことは決してなかつたはず！

「なのに、どうしてこうなった……」

……あれ？

俺はしばらく考えて、一つ気になることを思い出していた。確かに以前にもこんなことがあったよ'つな。……。あれは確か……前回の告白のときも……。

数ヶ月前

「俺と付き合つてください！！」

「ごめん、あんたじゃないから

「なんですよ――――――！？」

……つてことがあつたよ'つな。

「デジヤヴ、なのか……？」

そういうえば最近はよく女の子に振られる。

昔の俺は、言つては何だがモテモテだったんだ。

常に彼女はいたし、別れてもすぐに違う彼女が出来たつてもんだ。そんな俺が、今はこの有様だ。告白しても実らない。盛者必衰つてか？ やかましい！

今年に入つて、なんと4連敗中。しかも全部決まって

『あなたじゃないの』

と言われて断られている。流行つてゐるのか……？

「あー、また振られたか……」

ともあれ振られてしまつたものは仕方ないよね。
「まあいや！ 次の恋を探そう！」

と口にして決意を固めた その時だった。

「 あなたには、もひ無理よ 」

俺しかいないはずの屋上に、どこからともなく凜とした声が響き渡つた。

「だ、誰だ！？」

驚いた俺は声のした方へと振り向く。屋上の給水タンクの上にその姿はあつた。

「あ、あんた誰だ！？ 一体ここで何してるんだ……！？ ……つ

て、委員長！？」

どんな展開！？ なんで委員長があんなところに！？

俺は驚愕を隠しきれなかつた。その見覚えのある彼女の名は縁朱えにしづ夏。

我がクラスの委員長で、活発な性格と、美麗な外見で、クラスどころか学校中から人気を集めているアイドルなのだ。

だが、その彼女が何故か巫女さんスタイルでそこに立つていたのだ！！

それだけではない！ 特筆すべきはその巫女服！

真っ黒な巫女服だつて！？ そんな巫女服、見たことないぞ！？
「 なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ ……いや、今それはどうでもいい！？」

どうでもいいわけないけどね。実はすぐ一気になつてゐる。
「 委員長、今のセリフ、一体どうこうことだー」

「 その答えは どうつーーー！」

「 ……飛んだだとうーーー！」

委員長は得意げに給水タンクの上からジャンプした！

「 あ、危ないってーーー！」

と、俺は注意したものの、黒巫女服をはためかせ空を躍る姿はとても美しく、つい見とれてしまっていた。……のだが

「…………」

予想通りとこうべきか、着地失敗。

「あひやー…………。あれば痛い…………」

委員長はしづらべ悶絶していたが、俺の視線に気づき、わっと立ち上がりこひりに向き直った。

「やり直しよ！」

「…………何を…………？」

「あなたには、もう無理よ…………」

おお、今こけたことを完璧になかったことにしている……。なんてスルースキルだ！

…………って言つてゐる場合じゃないよね。

「なあ、委員長。それってどうこいつことだ？」

「あなたには、もう無理なのよ…………」（ナリナシ）

「…………」

…………マジで最初からやせぬのかよ…………。

「…………」

「…………」（ウルシ）

こや、そんな涙目にならなくて……。どれだけ恥ずかしかったんだよ…………。

仕方ない、少しだけ付き合つてやるか…………。

「なんで巫女わんー？ しかも黒だとー？…………こや、今それはどうでもいい！ 委員長、今のセリフ、一体どうこいつことだー？」

…………でセリフ合つてたよね？

「どいつもこいつも、あなたはもう一度恋愛することができないって。そう言つてゐるのよ」

あつけらかんと言い放つ巫女わん。いや、委員長。セリフは合つてたみたい。

バックには夕日。正直、絵になるよなあ。……着地に成功してい

ればもうと凄かつたのだろうけどね。

……いや、違うだろ俺！

今、とんでもない事を言われたぞ！？俺はもう一度恋愛が出来ないって！？

「あなたはもう一生恋愛することが出来ない」

「一生って……。もしかして死ぬまで？」

「そ。死ぬまで」

言い切られた！？納得いかんぞ！？

「なんでだよ！どうしてお前にそんなことが分かるんだ！？」

「見えるのよ。私には」

薄つすらと笑みを浮かべる巫女さん。瞳には涙が浮かんでるけど。やっぱり痛かつたんだなあ……。

でも全力で耐えている。口に打った場所をちょいちょい気にする姿が実に可愛らしい。

黒巫女服も間近で見ると迫力あるね。うん。とても似合つてる。しかも良いにおいがするし！

ショートヘアも意外と巫女服とマッチしてるし。

薄つすらと膨らむ胸も……うん。これがまあまあかな……

察しよひ。

思わず顔を緩めてしまつ俺。しょうがないよ。だつて可愛いんだもん。

……つて俺はこんなときに何考へてるんだー。今はそれどころじゃないだろ！？

でも可愛いデヘヘ。

「つてこと」

「…………フオオオオオ…………」（葛藤中）

「ねえ、ちゃんと聞いてるの？」

「もちろんさー！」

嘘です。半分くらい聞いてませんでした。

「そう。じゃあ話を続けるわね。それで私には人の“主人公時間”

を見ることが出来る能力があるの」

「へー、見ることが出来るんだー。すげいねー。」

「…………って主人公時間って何よ！？」

「主人公時間っていうのは、文字通り人生の間で主人公になつていつられる時間のこと。主人公時間は誰もが持つていて、その間はとにかく異性にモテるの。でもあなたはその主人公時間を」

「な、なんとなく次のセリフが分かるぞ。もの凄く嫌な予感。

「全部使い切つてしまつたの」

「なんだって…………？」

予想通りすぎるーーー！今までモテモテだったのはそういう理由だつたのか！？

…………って、おいおい待て待て落ち着け俺。まだ慌てる様な時間じゃない。

いくら可愛いとはいえ、このこの巫女さんの言つこと信じるつてのか？ そんなオカルト無理があるぞ？

「…………なあ、その主人公時間って、本当にあるのか？」

「あるわよ。現実にあなた、たつた今振られていたじゃない」

「なぬ！？ お主、見ていたと申すか！？」

「ええ、惜しかつたわね。主人公時間中だつたら、間違いなくお似合いのカップルになつていたでしょうに」

チクショーつ！ やつぱりそうだつたのか！ お似合いのカップルだつたなんて……。なんてこつたい！

「ちなみに、過去3回全部見てたわ」

「なんだつて…………！」（二回目）

なんかストーカーまがいだな！ でも可愛いから許しちゃう不思議！！

…………一度目の絶叫。さつきから叫んでばかりだな俺！ 喉痛い……。

「それに全てこう言われてたでしょ？ 『あなたは違う』ってね」

「何故それを！？」

図星だつた。過去全て例外なくそういう言われていたのだ。

「これはね。あなたは主人公とは違つて、そういう意味なのよ？
ヒロインはいつだつて主人公と恋実るものでしょ？」

「うか。だから今まで同じセリフで振られたわけね！　なるほど、
納得！！」

「……するわけがなかうー！　すると俺はもう一生恋愛が出来ないつてのか！？」

「……なあ、どうにかなる方法はないのか？」

「俺はすがりつくような田線を委員長に向ける。

「ないわ」

「即答！？」

「視線すら合わせてくれない！？　血も涙もねーのか！？」

「……ダメだ……。もう死のう……」

「……と、言いたいところだけど、……つて、聞いてる？」

「委員長が何か言つてたみたいだけど、俺はすでに現実から逃避していた。

「もうダメなのー！　一生童貞なんて、ボクには耐えられないのー！」

「あのー、もしもし？」

「もうボクに構わないで！　もつ決めたのー！　死ぬのー！　飛び降りるのよー！」

「…………」（イラッ）

「いやあー！　止めないで！　ボクを止めないでえー！」

「…………いい加減にしない」と一生童貞にするわよ？」

「すんませんふざけすぎましたゆるしてください」

「一気に現実に戻されたぜ……。死ぬ気なんてありませんよ？　ちよつとふざけただけです……ん？」

「『と、言いたいところだけど』つてことは……もしかして続きがあるの？」

「あるわよ！　聞くのー？　聞かないのー？」（イラッ）

「聞きたいに決まつてるー！」

「次ふざけたら一生童貞だから」（一ツ「コリツ」）
委員長は笑顔ながらも眉毛を引きつらせていた。笑顔が怖いとは
このことだ……。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。ぐすん。
でも怒った顔も可愛いなあフヒヒ。

「あなたはこれから脇役として生きていくのよ

「……脇役、だつて……？」

「そう。物語には必ず必要となる脇役。それをこれから演じていく
の」

「どういうこと？」

よく判らん……。

「あなたはすでに主人公時間を使い切った。つまりあなたには主人公になる力が残っていない。それでも主人公になりたい。そう思うなら方法は一つ。他者の物語に入つて脇役を演じること

「他者の物語？ 脇役を演じる？」

「主人公の人生に大きく影響を与えるような名脇役は、それなりの力を得ることが出来るわ」

「つ、つまり……どういうことだつてばよ……」

俺の頭上には“？”マークが大量に浮かんでいることだろう。

「簡単な話、他者の物語に入り込んで活躍し、人気者になればいいつてこと」

「人気者になると、どうなるんだ？」

「例えばドラマの脇役が人気になれば、その脇役を主人公にしたスピノオフ作品が作られることがあるでしょ？ それと同じことね」

「ふむ。なるほど、実に分かりやすい。」

「判つた。でも一体どうやって脇役になればいいんだ？」

「これから主人公時間を迎える人と仲良くなつて、恋愛の手伝いをすればいいの」

「そういうことね」

「よくあるパターンで安心した。……よくあるのか？」

「他者の物語にどんどん入って活躍すれば、いずれ спинオフが作られるかもしない。でも、それはとても大変なことよ？ 主人公の期待、信頼に全力で答えないといけないのだから。あなたはどうする？ やつてみる？」

「どうやら俺の主人公時間はもう無いらしい。このままだと一生独身だって！」

「そんな人生はまっぴらご免だ！」

「ならば答えはひとつしかないだろう！」

「やるに決まってるだろ！ 名脇役になつてやるぜ！」

「なんとしても主人公に戻つてやる！」

「それに脇役つていつても、ただ恋愛成就の手助けをするだけだ！」

「なんてことはない！」 ……はず！

「……ん？ 不意に疑問が俺の脳裏をよぎった。

「なあ、なんで俺に主人公時間がないこと、教えてくれたんだ？ お前にとつてはどうでもいいことだろ？」

「ええ、確かにどうでもいいわ」

「……なかなか辛口な巫女さんだな。そこがまた味がある！」

「でも、あなたには興味があるの」

「俺に興味！？」

「うはっ！ 久々に俺の青春が来たか！」

「あなた、色々と雑用してくれそうだからね」

「……そういうことね。まあ期待はしてなかつたよ。何せ主人公じゃないもんね……。」

「私は縁結びを司る神様の巫女なの。我が家は代々縁結びの神様を奉つていて、神様の手伝いをすることが仕事なの。でもね、最近仕事が滞っちゃつて。一人では限界を感じたから、あなたに手伝つてもらいたいの。それがさつき言つた『脇役を演じること』。それであなたは主人公に戻れる。私も楽できる。一石二鳥だとは思わない？」

「なるへそ。そういうことだつたわけね？」

ふーむ。要するにバイトみたいなものか。給料はお金の代わりに主人公時間。

「では来週から行動開始よ！ 手順や注意事項はその時に伝えるわ」

告白失敗、衝撃の事実から一転、この急展開。

いやあ、人生ってどうなるか分からないのですねえ……。

そんな俺の人生よりも、一つ気になっていたことがある。

「ところでさ、何で巫女服着てるんだ？ しかも何故黒？ 神様に仕えているからとか、なにか複雑な理由が？」

「 ただの趣味よ……」

「なんだって…………」（二回目）

一度あることは、やつぱり二度あつたね。二度目の正直なんてことわざは知らん。

第一話 巫女さんは委員長

「ふわあ～～～」

主宮高校に通う俺、里美公太は、人気の少ない朝の教室で、恥ずかしげもなく大きな欠伸をしていた。

ね、眠すぎる……。昨日、寝たの三時だもんな……。そりや眠いって。

なんだか考え事が多くてね。特にここ最近、色々とありますぎて……。告白失敗とかね。それと

委員長が巫女さんだつたりとか……。俺が一度と恋愛できないのだとか……。

なんだかんだでショックが大きかつたんだよね。だからこそ、今日は早めに登校してきたわけだし。

そうだ、先週の巫女さん。彼女の話をしよう。彼女は……って、ちょうどいいときに登校してきた。

「おはよう、公太」

田の前に立つ女子の名は縁朱夏。^{えにしづか} 我がクラスのクラス委員長を務めていて、顔良しスタイル良し、性格良しの黒髪短髪の似合つ、学校中の人気者だ。

「公太。 判つてるでしょう?」

自覚しているのかつていう田ですね……。もちろん判つてますよ！ 今日から脇役人生スタートなんでしょう？

「私が巫女コスプレをしてたこと、喋つたら殺すわよ？」

「そつちの話！？ あれ、すゞく良かったのに……。出来ればみんなに広め」

「判つてゐるわよね？」（ニシココ）

「……はい」

無意識に首が縦に振幅していた。怖ええ……。話を変えよ！……。

「委員長。先週言つていた手順や注意つて、一体何なんだ？」

「私のことは朱夏でいいわ。これからはパートナーだもの。私もあなたのこととは公太つて呼ぶから」

「いきなり名前で呼び合つだと！？ なんてハイレベルな！」

「それはさすがに恥ずかしいぞ！？ 委員長」

「……何照れてるの？ これからは当分仕事を手伝つてもらわなければならぬし、何より公太。あなたはもう主人公じゃないのよ？ 照れる要素ないでしょ」

「ふぐつ！」

「だから安心して名前で呼びなさい」

「……わかつたよ、朱夏……」

「理解できたならよろしい。詳しいことはまた後で話すわ。とりあえず主人公を見つけないとね。今はまだ見当たらぬけど近いうちに現れるはず。主人公が現れたら、私はすぐに分かるから、見つけ次第連絡するわ。……いい？ コスプレのことは内緒よ！」

やけに念を押して、自分の席に戻つていったな。そんなに隠すとか？

「……急に名前で呼べとか、コスプレしていること隠せとか、まったく女の子の気持ちはわからんなあ……つて！？」

突如視界を塞がれた。この硬くてこつこつした感触は……。

「おう、公太。金曜日はじうだった?」(だきつ)

「(だきつ)じゃねーよ! 朝つぱらから鬱陶しいんだよー。ド

ラ!」

黒光りする筋肉質な腕を振り払う。えーい、離せ! 男に抱かれ
る趣味はねえ!

「つれねえなあ、三日ぶりの再会だといつのこ

「やかましい!」

俺の視界を塞いだ張本人、馴れ馴れしくてムキムキなこいつの名
前は浅間龍一^{あさまりゅうじ}という。

学校一体格が良く、スポーツテストでも常に上位成績。反面、学
力は最下位。

趣味は筋トレとギャンブル全般。麻雀が好きで、名前にも龍とあ
ることから、俺たちはドラと呼んでいる。

いかつい外見や、過去にやんちゃしてたという噂のせいで、皆か
らは敬遠されている。根はいい奴なんだけどね。

「どうだつたんだよ? 成功したんだろ? あの雰囲気で失敗なん
てありえないからな!」

「……うつ!」(グサツ)

そうだった。まだ皆には話してなかつた……!

「ま、まさかお前、成功を通り越してすでに性交までしたんじゃ
……。週末を利用して彼女としつぱりな関係になつたとかねえだろ? う
な……!? ま、まだ早いぞ!」

「は、はは」

笑うしかねえ……。イテヒよ、心がよお……。

「羨ましいねえ! こいつう……!」(ぐづぐづ)

「止めろドラ! いてえ!」

痛い痛い、ほっぺたに指を突き立てるな! そしてこれ以上俺の
心の傷を広げるな! !

くそう! こいつどれだけ力があるんだ! ビクよウとしてもビ
クともしないとは! 誰か助けて! !

「 ドラ、公太が痛がってるよ」

「 その声は 優！」

助けがきた！ 僕はその救世主へと視線を送る！

長髪をポニー テールのように後ろで纏め、長身でモデルのようなスタイルの眼鏡が似合つ、このイケメン。名前は和久井優わくい ゆうという。優という名前の通り、成績優秀、運動神経抜群の超優等生なのだ！ ちなみに俺と優は幼稚園からの付き合いで一番の親友なのだ！ ほらほら、親友が困っていますよ！ さあ、助けておくれ！

「 公太、面白い顔だねえ。ドラ もつとやれ」

ちょっと性格が歪んでいるのも彼の魅力だ！！

「 あいよー」（ぐりぐり）
優の号令と共にさらに腕の力を強めるドラ。
「 うりきりものーーーーー 痛い痛い！」
「 なんて冗談だ。ドラ、もういいだらう？」「
「 そうだな。ほら、解放だ、公太」
助かった……。ドラめ、憶えてるよ……！

「 それよりも公太。どうだった？」
「 ギクッ」

「 どうだった？ つて。もちろん皆白のことだよね……。

「 うう、どう言つたらいいんだろう……。

「」

「」

「……その様子だと”また”振られたのか」
「ばれた！？」

「はあ！？あの雰囲気の中、振られたのか！？」
ドラの言つあの雰囲気とは金曜日の放課後のことである。
皆が祝福し、誰もが新カツプル誕生を祝う（一部妬みの視線はあ
つたが）ムードだったのだ。

「……ああ、振られちまつたよ」

「うなだれる俺。」

「マジか……」

「そうか。それは残念だ」

二人は、それがまるで自分のことかの如く、俺と一緒に落ち込んでくれたんだ。

お前ら、そこまで俺のことを心配してくれて……（うるつ）
（うるつ）いついつ時いつ、俺が元気になつて一人を安心させて上げないと一

「二人共、心配してくれてありがとな！でも、そんなに落ち込まないでくれよ！もう過ぎたことなんだし」

「じゃあ優の負けだな。学食のBセシト、ようしく！」

「えつ？」

「まさか麻雀と喧嘩以外でドラに負けるとはね」
「ハハハハ、俺はギャンブル全般に強いからな！」

あれれ？君ら、ひょっとしてボクで賭けをしていました！？

「まさかまた公太が振られるなんて計算外だ。今回は僕も手助けし

たし九割は決まると思つていたけど。確立はあくまでも確立つてことだね」

「ギャンブルは計算じやないからな。流れつてもんがあんだよ」

「ドラはいつも流れに恵まれすぎなんだよ」

「ぐすん……。びしきょう……涙が止まりませんことよ……。」

賭けに負けた優は、おもむろに財布から千円札を取り出して、ドラに手渡した。

「お釣りはいらないから」

「サンキュー、優」

無駄にイケメンだな！ おいー！

俺は今、友情とはどうあるべきかを考え直すべきなのかも知れません。

「ドラ、お釣りで公太にも何か買つてあげてよ」

「そうだな、どうせなら全額、公太のために使つかー！」

やつぱり大親友だよ！ 一人共ー！

「ふー、今日も終わつたか」

授業が終わつて帰りのHRが始まるまでの時間つて、一番リラックスできるよね。この解放感がたまらんね。

「そういえば今朝以降、朱夏から何も接触がなかつたな。……あ、

ウルモフ」

そう考えたとき、教室に担任が入つてきた。

「席につけー」

担任の蒙古先生。007のウルモフ将軍に似ていてことから、皆からはウルモフと呼ばれている。

日直の号令の後、ウルモフの楽しい楽しい説教半分のHRが始ま

つた。

必要事項とちょっとした小言の後、頭を搔きながら面倒くさがりに現在一番重要である案件を口にした。

「……あー、二週間後には学園祭があるだが、うちのクラスだけ出し物が決まってない。お前ら一体どうするつもりだ？」

三週間後、我が校の学園祭が一日にわたって開催される。でも我がクラスは、どうにも個々の自己主張が強すぎるといふ、纏まりが欠けているところか……。

「ZZZ……」

……優は寝てるし。

「腹減った……。もう我慢できん！！！」

……ドラはいつそりとパンをかじり。

「盗まれてる————！？」

……朱夏はケータイゲームに夢中。

我がクラスはこんな奴らばかりなわけでして。未だに出し物が決まってないのだ。

「このままでは何も出来なくなってしまうぞー。誰か良い案はないのかー？」

ウルモフが怒鳴り、静まり返る教室。無理も無い。

何故ならこの質問は、今まで幾度と無く繰り返されてきたものだからだ。

実はこれまでに幾つも案は出されてきた。しかし、その度に男女間で論争が繰り広げられ、対立。結局纏まらず廃案になってきたのだ。

次第に誰一人として案を出さなくなり、現状に至る。

「……はあ。お前ら、残りは二週間しかないんだぞ？ 本当にどう

するつもりだよ」

ウルモフもいい加減にしどといた表情で嘆息している。そりは言つてもなあ……。

そんな中、クラス委員長である朱夏が、唐突に立ち上がり提案した！

「占いをやりますーー！」

「……占い？」

女子（テニス部）「あ、それいいかも！」

女子（ラクロス部）「私、賛成！……和久井君との相性……占いつてもらおう……フフ」

女子（相撲部）「それちょべりぐー」（死語）

女子の間から賛成の声が上がる。なるほど、女の子は占いが好きだもんね。

しかし、男子の間からは反対が噴出。

男子（サッカー部）「占いなんてつまらないだろ！」

男子（野球部）「ソノヤーツス！」（やんなのやる氣でねーツス）

男子（オタク）「デュフフ、それ、リア充しか喜ばない内容ではないですか」

K.ねえ、公太氏り」

「リア充ってなんだ……？」

優「Z Z Z……」

ドリ「はぐはぐはぐ いつーー 喉がーーー！」

と揃つて野次を飛ばした。この流れはいつも論争パターン

……！

「おいおい、大丈夫かよ……」

心配して朱夏を見ると

わ、笑つていいー？　この状況をー？　なんだあの冷徹かつ
余裕な笑みはー？

次第に大きくなる男子の声。そんな中、朱夏は凛として言い放つ
た！

「　巫女服」

「　　！？！？」

「の言葉に反応しない男子はいなかつた。騒々しかつた教室が、
一瞬にして張り詰めた空氣に変わる。

「みんな、よくお聞きなさいー！ー」

「ぐふつー。」

朱夏はウルモフを押し飛ばして壇上に上がり、力強く演説を始め
た！

……大丈夫か？　ウルモフ……。

「占いで最も大切なこと。それは雰囲氣よ。タロットにしろ、手相
にしろ、密に神秘的な雰囲氣を感じさせることが一番なの。そのた
め非常に重要なのが衣装。そして日本人がこよなく愛する神秘
的な衣装。それは一体何？」

「巫女服ですー！」

と誰かが元気よく答える。……ドラだった！

「その通り！　だからこや」

「クリという音が聞こえてくる。やはりドラだった。もはやドラの眼は龍のように猛々しい。……てか血走ってるだけか。

クラス全員の視線を一身に浴び、朱夏はどどめの一言を言い放つた！

「 女子は全員、巫女服を着ます！」

「 「 「 賛成だ——————！」」

男子たちは大いに叫んだ！ 魂の叫びって奴だね！
この叫びの中には、もちろん俺の声も含まれている！ 一番大声を上げていたのはドラだったが。

女子（相撲部）「ちょっと男子ガチうるさいんですけどーー、チヨベリバ～」（そろそろウゼエ……）

女子（ラクロス部）「ちょっと巫女服着てみたかったしいいかもね！ 男子にはドン引きだけど！ ……和久井君に見せつけよ……フ

フ」

女子（テニス部）「巫女服、楽しみだね！」

意外なことに女子たちから反対意見は出なかつた。みんな巫女服に興味があつたんだね。優以外。

……といふかこんな大歓声の中、寝続けられる優つてすげえ……。

我がクラス初、満場一致でクラスの出し物は占いに決まったのだつた。

第一話 主役はホッヂキス

「公太」

怒濤のHRが終わって間も無く、朱夏が声を掛けてきた。

「とうとう現れたわよ、主人公が。しかもこの教室に「なんだって！？ もう主人公が！？ しかもこのクラスだと！？ やばい……緊張してきたぞ……。」

朱夏には主人公時間を迎えた人間がわかるらしい。一体誰なんだ……！？

今は放課後。教室に残っているのはごく僅かだ。

「この中に主人公が……。だ、誰なんだ？」

緊張が走る。喉が渴く。何せ俺はこれから当分の間そいつのサポートに徹する脇役にならねばならないわけだ。見知った顔なら幾許かはやりやすい。

朱夏が人差し指を立て、ゆっくりと矛先をターゲットに向ける。

「主人公は……あいつよ……！」

朱夏が指を差した生徒。あの姿は……。

「……マジですか……！？」

俺の目に映った生徒。それは我がクラスで最も影の薄いと称された男。

「マジよ。今回の主人公。それは ホツチキスよーーー！」

「…………ホツチキスだと…………ーーー！」

ホツチキス。本名は確か倉敷啓くらしきけい……だったはず……。

クラスで最も目立たないのに、皆勤賞。

そして”何故か常にハサミやホツチキスを持ち歩いている”とい
う”目立たない奴あるある”を総取りしたかのような男なのだ。
それゆえに付いた仇名が”ホツチキス”。

「大丈夫なのかよー？ ホツチキスだぜー？ あいつが誰かと会話
しているところすら見たこと無いんだぞー？」

「でもやるしかないのよ？ でないと一生ー」

「やりますーー！」

……その先を言われるのがとにかく怖いぞ……。

「そしてヒロインは…………ああ。あの子ね。…………普普ッ！！！
「ヒロインだつて！？ ホツチキスの相手のことかー。朱夏さんや、
何で笑つているのですかな！？」

「ハハハハッ、ヒー、お腹痛いわ…………！ ごめんなさい、だつて今
回のヒロインつて、先週公太が振られた相手なのよ。これはまた災
難ねーー！ ハーツハハハ

「…………お前、同情する気すらないだろつ…………」

朱夏は顔を真っ赤にして笑つていたが、俺の顔面は蒼白になつて
いた。血の気が引いていくのがわかる。

「そんなのつて、ありか？ まだ心の傷、癒えてないんだぞーーー！」

「仕方ないでしょー？ もう決まつたんだから」

先週、俺が振られた相手。それはクラスでも朱夏と人気を一分す
るほどのアイドル的存在。

「そんな……まさか　巡崎さんだなんて……！」

めぐりさきみと
巡崎美都。 それが彼女の名前だ。あだ名はみつちー。

美術部所属で、在学中に多くの賞を受賞している我が校きつての天才だ！

それでいて自分の才能を鼻にかけることもなく、おつとりとした性格で誰にでも優しく、男女問わず大人気のアイドルなのだ！

それに付け加え、あの高校生離れしたスタイル。胸もデカイ事も然ることながら、特筆すべきはあの尻！！ 素晴らしきかな安産体型で、モロ俺の好みだつたのだ！！

そう、俺は尻フェチなのだ！！

「信じられん！　だつてあの巡崎さんだぞ！？　ホツチキスとなんて考えられん！！」

「でもホツチキスなのよ。これはもう変えよつのない事実。……そうだわ、公太にもこれを見せてあげる」

そう言つて朱夏はバッグの中からヘンテコな形のメガネを取り出した。

「”見縁メガネ”～～！！」

「……なんだそれ？」

ドรามンガポケットからアイテムを出す時のSEが脳内に響き渡つた。

「このメガネはね……。なんと！　人の主人公時間を見ることが出

来るのです！！」

「見縁に見えるのか！？」

「ふふふ、洒落が聞いていて面白いでしょ？」

いや、そんなに面白くないけど……。

「そんな便利な道具があるのか！？」

「そうよ。公太、これでホツチキスを見てみなさい。面白いものが

見えるから」

俺はおずおずとメガネを取り、そつと掛けた。

「見えてきたでしょ？……”縁の糸”がね……」

ホツチキスを見る。特に何も変わった様子はない。……だが。

「…………おお！？」

見えた！ 微かにだけど間違いなく！ ホツチキスの左手薬指から、赤い糸が伸びていた！

「なんだあの糸！ あれが縁の糸つていうやつか！？」

「そ。主人公とヒロインを繋ぐ糸よ。運命の赤い糸つていうのは、これが由来なのよ？ 主人公の糸が、ヒロインの指に結ばれたら晴れてカップルになれる」

「ふむふむ。でも、その糸と主人公時間つてどう関係あるの？」
「糸の長さ＝主人公時間の長さなの。糸が長いと、それだけヒロインの指に近づきやすく、結ばれやすい。そういうイメージしてもらつて構わないわ」

「へえー、へえーっと、俺はエアへえーボタンをバンバン叩く。

「しっかりと見てみて。ホツチキスの糸がどこに繋がっているかを……予想は出来ているけどね。でもこの田で見ないと信じられない。

「……ああっ！」

予想通りの結果が突きつけられる。ホツチキスの糸は、巡崎に繋がっていた。

「分かつたでしょ？ ホツチキスの糸は、みつちーの指に結ばれている。だからホツチキスが主人公で、みつちーがヒロインってこと」

……分かつていたとはいえショックだ……。

だつてそうでしょ！？ ボク、コクつたの三日前なのよ！？

「そうだ公太。自分も指を見てみなさい。一目瞭然よ」

え……、ボクの指……？

恐る恐る自分の指を見ると……。

「ない！ 赤い糸どころか、その糸屑一つない……」

「そういうこと。それじゃヒロインと結ばれるどころか、結ぶのに必要な長さすらないでしょ」

「そういうことなのね……」

改めて自分の境遇を突きつけられた感じだったね。だつて、一ミリもないんだよ？ 縁の糸。

「ちなみに私はメガネなしで見ることが出来るわ。それが私の能力なの」

「能力！？ なんかかかけえ！？ 能力者バトルが出来るつてか！？」

「……出来ないわよ。はい、メガネ返して。分かつたでしょ？」
確かに見えた。まだ細く、薄つすらとだが、でも間違いなく縁の糸は繋がっていた。だが！

「それでも納得できるか！ それに俺はまだ彼女のことを
「諦めてないの？ どんなことをしたって、絶対100%無理な
に？」

「し、しじー！ そこまで言わなくても…… 鬼！ 悪魔！ 」

「巫女です」

「そうでした」

……俺、案外余裕なのか？

「公太が諦めていようがいまいが関係ないの。もう縁の糸は繋がっ
たのだから」「分かっている……。分かってはいるよう……！ だけどよう……。

「やいなこと一生ビ」

「やいわせていただきます……！」

背に腹は変えられん！ 今しがたの辛抱であるぞ！ 頑張れ、俺！
「でも、俺はまだ手順なんて聞いてないぞ？ どうすんだ？」
「とにかく今は声を掛けるだけでいいわよ。少し会話したら戻つて
らっしゃい」

それが一番難しいんだよな……。ホツチキスと会話したことなん
て。

『ホツチキス貸してー』『はい』『ありがとづ』

……くらいしかないしな……。

とにかく俺の人生が掛かっているんだ。声を掛けるだけ掛けてみ
よづ。後は何とでもなれだ！

「あ、公太。一つだけ注意事項を言つておくわ」

勇む俺を朱夏が止める。俺が朱夏に視線を返すと、朱夏は真剣な眼差しを向けてきた。

「絶対にみつちーと付き合わないで」

！？

「それははどういう意味だ！？ そもそも脇役はヒロインと付き合えないのじゃ？」

「そう。付き合えない。でもね。付き合つて至るまでは常人と同じなのよ」

付き合つて至るまで……？

朱夏は話を続ける。

「主人公時間のない人間でも、付き合つて前までは普通に誰とでも接することができる。でも、いざ付き合つとなると話は変わつてくるの。告白やキス、それに準ずる行為は全てNG」

「つまりどういうことだ？」

「それは主人公のヒロインを奪つてしまつことになるから」

「……ヒロインを……奪つ……？」

「そう。今回の場合、公太がみつちーに告白したり、されたり、キスしたりすると全てが終わりつてことね」

「……ありえるのか？ そんなこと」

「ありえるわ。先に言つた通り、付き合つまでは普通に接することが出来るの。絶対に忘れないで。主人公のヒロインを奪つてはいけない。たまにあるのよ。我慢できなくなつて脇役がヒロインを

」

「絶対にしない！ するわけないだろー！」

「俺は一度巡崎に振られているんだぞ？ ありえないって。

「そう。なら安心ね。でも公太、気をつけなさい」

朱夏はさりに険しい表情になり、言葉を続けた。

「主人公やヒロインは脇役次第で大きく心境や行動が変わる。公太のちょっととした間違った行動が、後で大きく響くこともある。公太が良かれと思って行動しても、それがマイナスに働くときもあるの。こればかりは予測できない。だからとにかく気をつけなさい」

「……判った……」

俺が良かれと思つてもマイナスに働くこともある、か。気をつけなきやな……。

「だからといって萎縮しちゃダメよ！ 最初はとにかく目立つこと！ それだけを頭に入れておきなさいー！」

氣をつけながらも、とにかく目立つ。ここつあ、ハードだぜ！

「では公太！ 早速行動開始よ！ 行つてきなさいーー！」

「ああーー！」

ついに始まる俺の脇役人生！ 一生童貞は嫌だ！ 絶対に主人公に帰り咲いてやるぜ！

名脇役への第一歩。それはすばり、主人公と仲良くなること！ 今までまともに話したことはないけれど、なんとかなるだらつ。いや、なんとかしよう！ いくぜーー！ 俺ーー！」

「なあ、ホツチキス！」

「…………な、何かな、里美君…………。何か用…………！？」

そりゃ驚きすぎだつて、ホツチキス。俺から声をかけられるのが
そんなに珍しいか？

珍しいよな。俺だつて久々に話しかけたんだから。

「いや、用があるつてわけじゃないんだ。ただ…………」

「ただ…………？」

「…………？」

「…………？」

「うつ。予想以上に会話が持たない…………。

そうだ！ こういうときは共通の話題を振れば無難だ！
まずは これで攻めてみるか！

「数学の授業、眠かつたよな！」

「…………僕はそうでもなかつたんだけどな」

何ですとー？ あの数学が眠くないとなー？

「で、でもさ。微分とか積分とか、聞いてるだけで眠くなるだろ？
「そんなことはないよ…………。僕、理数系の大学を目指してるから微積
分は勉強しているし…………得意なほうだよ？」

「マジか！ ジゃあ今日の宿題の答え、見せてくれよー！」

「あ、うん…………。別にいいけど…………」

よつしやー！ これで今回は優に借りを作らずに済むぜ！

…………つて目的が違うー………… そりじやないだろ、俺！ 何か話題を
そうだ！

「体育のサッカーはどうだった？ 楽しかったよな！ 何せ俺はハツトトリックを」

「僕、運動は得意じゃないから……あまり楽しくなかつたよ……。里美君は運動できるから羨ましいよ……」

「サッカーが楽しくなかつただつて！？ 俺なんて体育がなかつたら学校に来ないくらい楽しみなのに！」

「俺と好みが正反対だなんて……！ ダメだ、仲良くなれる気がしない……。」

「くそ……ひとまず話題を変えるぞ……！ 次は これだ！！」

「ウルモフ、どうなつたかな？」

朱夏がHRにて押し飛ばしたウルモフは、勢いのままに頭から転倒、保健室へ運ばれていた。

「そう言えば、どうなつたんだろう……心配だね……」

「ああ……心配だな」

「そうだね……」

「……は、話が続かねえ……。」

その時、唐突に教室の扉が開いた！

「痛たたた……、まつたく委員長の奴、無茶苦茶しやがる……！」

氣まずい空氣の中、頭に氷を当てたウルモフが教室に戻ってきた。

「ウルモフの兄貴！ 無事だつたのか！ てつきりフイリップンで戦死したのかと……」

「誰がウルモフだ！ 勝手に殺すな！ しかもそれ、”はだしの

ン”ネタだろ?』

「よく知ってるな……、ウルモフ……」

「お前もな……。そいやお前ら帰宅部だろ? サッサと帰つて勉強でもしひけ」

それだけ言ひとウルモフは顔をしかめて教室から出て行つた。

「ウルモフ、無事だつたな……」

「……そうだね……」

またもや氣まずい空氣。

こんな空氣、耐えられねーよー。ダメだ、さらに仲良くなれる気がしない……。

待て待て、ここで諦める訳にはいかん!! とつておきの話題を

……!!

「昨日のプロ野球の試合、見たか? 我らがジャイアーズの圧勝でさ!」

押売魔神ジャイアーズムズ! 他球団の良選手を惡魔の誘いで(金の力)で引き抜き、圧倒的財力でリーグを勝ちぬく俺の好みの球団だ!

「いやー、良かつたよなあ……。何せ打順1~8番までの全員が去年まで他球団で4番だった選手だもんな! まさにオールスター! 俺が嬉々として話し出すと、それに反比例するかのようにホッчикスの表情は沈んで行つた。

「……僕は相手のタイガルダズのファンなんだ……」
なんだと! ? タイガルダズファンだと! ? 天敵ではないですか!

关心タイガルダズ。ジャイアーズムズとは正反対で選手一人ひとりをじっくりと育てる地味な球団だ。俺の趣味に合わん!

「ジャイアーズムズは少し強引すぎるよ……。野球はタイガルダズみたいに選手を大切にしなきゃ……」

「そ、そうか？ 僕はあの傲慢なプレイスタイルが大好きなんだけど……」

ジャイアーズムズとタイガルダズは因縁のライバル、犬猿の仲なのだ！

無論、そのファン同士の仲だつて悪い！ ダメだ……、もはや仲良くなれる気がしない……。

「……里美君……僕、帰るね……」

「お、おつ……。じゃあまた明日な……」

ホッキスは早々と教室から出て行った。

無茶言つなよ。俺だつてこれでも頑張つたんだぜ？
……などと言える空気ではないことは読めた。

不機嫌な朱夏だつたが、しばらくすると何かを閃いたような表情に変わる。……嫌な予感。

「公太。あなた今までずっと主人公をしていましたよ？ だから脇役に慣れてないのよ」

「う～む。 そうなのか？ 今まで主人公の自覚なんてなかつたけど」「自覚がないってほどに、主人公してたのよ。さすがは”元リア充”ね

「リア充つて、なんだ？」

「……」

「あ、おい？ 朱夏、どうしたんだ？」

「一体どうしたんだ！？ 朱夏がなにやらブツブツ言いながら震えている！？」

「……ん？ どうして拳を握り締めているんだ？ ……って、グオエエエッ！！」

今度はみぞおちに入った……。い、息ができる……！

「……だ、だから……な、んで殴るんだ……？」

「ふん！」

倒れこむ俺を見下しながら、腕を組む朱夏が言い放つ。

「リア充という言葉を知らない時点で、リア充なのよ……！ な
んで私がこんな説明しないといけないの……」

「な、なんでそんなに怒っているんだよ……？」

「うるさい！ リア充つてのは昔の公太見たいな奴のこと言うの

よ!! モテモテでウハウハで毎日がリアルに充実していましたでしょう?」

朱貢

朱夏は俺にひじごと葵をいじりで言ふ

ーでも良かっただわね！あんたはもう立派な”元”リア充よ！！

「元々言うな！ 今だつて十分そのリア充つてやつだ！」

「主人公時間が無いんだもの。これからは一生リア充になれないか

もよ？ とすると、生童貞

「止めてくれ——————！」

「これからのためにも脇役の何たるかをしきりと教える必要があるわね……」

「ふくふく、うれしうれし」

公力 これが公力

「あー、あー、聞こえません！」

えーい！
耳を塞いでやる！！
俺にはもう何も聞こえん

110

「ちやんと畠ねむてー」

「は」

暴力反対！ と言える空気でないことも分かる。

二五 ䷗ 偃 空氣詭めのじやなしが

公文書の構成と構造

「はい……ええつ！？」

と云つことで、俺は半ば無理やり朱夏の家に行くことになつ

た
の
だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7768y/>

俺こそが名脇役！

2011年11月24日14時00分発行